

特集2 / コミュニティの幸福と公正——コミュニティ心理学と公共研究

## コミュニタリアニズムとポジティブ心理学・ コミュニティ心理学

千葉大学大学院社会科学研究院教授

小林 正弥

### 正義を巡る3つの類型：福利型、自由型、美德型

ブリレルテンスキー先生から素晴らしい講演をいただきましたが、聞かれている方々には、心理学については、あまり詳しくない方が多いと思います。

そこで私のほうからは、先生が研究されているコミュニティ心理学や、最近急速に展開しているポジティブ心理学を少し紹介しつつ、「私自身が研究しているコミュニタリアニズムが、どういう関係にあるのか。そして、私の議論と先生の議論がどういう関係にあるのか」——その辺をかいつまんでお話をさせていただきたいと思います<sup>1</sup>。

私は公共哲学というものを研究しており、公共哲学の世界的な代表者としてはマイケル・サンデルが有名です。公共哲学とは、広く人々が共有し、行動や政策の指針になる考え方を意味します。

日本の公共哲学では特に、望ましい公共について考察を展開しているのですが、公と公共という言葉を使い分けようという提案がなされています。公というのは国家やお上のことを意味しがちであるのに対して、公共というのは、人々が共に考えて行動するという水平的な部分を重視しているわけです。ですから、コミユナルなことやコミュニティが、公共という観点からは、非常に大事になります。

---

<sup>1</sup> 以下、ポジティブ心理学と公共哲学との関係については、拙稿「幸福公共哲学とその科学的展開——ポジティブ心理学と政治経済学」(『公共研究』第12巻第1号、2016年3月、3-18頁)、および「ポジティブ心理学と公共哲学」(『公共研究』第13巻第1号、2017年3月、86-96頁)を参照。

そして、プリレルテンスキー先生のお話の中でも正義という言葉が出てきましたけれども、政治哲学を考える際に正義は非常に重要な概念です。それを考える際の代表的なアカデミックな考え方を私は三つに分けて説明をしています。一つは福利型というふうと呼んでいて、一般的には、功利主義がその中心と考えられています。ベンサムの「最大多数の最大幸福」という考え方でよく知られており、経済的な発想によく見られる考え方です。

二つ目は、私が自由型と呼んでいるもので、法的な権利を中心として、個人の自由な選択を可能にする考え方です。三つ目として私が美德型と呼んでいるのは、美德とか善といったような倫理的な発想を例えば政治においても考えていこうというものです。

そして、この中で自由型は、一般的には大きく二つに分かれるというふうに、考えられていまして、そのうちの一つが、リバタリアニズムです。経済ではネオ・リベラリズムといわれている考え方と近く、個人の自己所有、そして財産の権利を重視して、経済的な規制緩和とか、国家を最小限にとか、民営化といったような、よく聞かれる政策的な議論とも結び付いています。

他方でジョン・ロールズという哲学者が提起して有力になった平等主義的なリベラリズムは、格差があまり大きくなならないように、成長と両立するように再分配を行うことを主張します。アメリカ政治哲学においては、福祉国家を擁護する論理です。

いずれも、個人の自由な選択を重視していて価値観が多様な世界の中で皆が合意できるものとして権利を重視する。そこでこの自由型は、どういう権利を中心に考えるかということによって意見が分かれるわけです。リバタリアニズムは所有の権利を非常に重視しているので、大きな福祉に反対しますし、他面で平等主義的なリベラリズムのほうは、福祉の権利、社会権を認めようとするので、福祉を擁護するわけです。ですから、さきほどの講演にあったような例えば経済的な格差や貧困の問題、あるいは公正の問題が非常に重要な問題関心となってくるわけです。

さて、他方で美德型は、コミュニタリアニズムというふうと呼ばれることが

多いですけども、私は二つの大きな要素があるというふうに説明をしています。

一つ目は、善き生 (Good Life) というものを重視する。しかも、それが正義を考える際にも重要とするのです。二つ目は、個人の自由というような、個人だけを重視するのではなくて、人々が共に生きて共に考えるという、共の部分、共通性も重視するということです。

マイケル・サンデルが、この思想の代表者として知られていますけれども、彼は自己というものがコンテクスト (文脈) の中にあって、負荷を帯びている自己 (encumbered self) であると指摘します。ロールズのような抽象的な自己観に反対して、このような自己の具体的な在り方を重視するのです。

ただし、このコミュニタリアニズムは、国家主義とか保守主義のような右の考え方とは区別されていて、その性格を明確にするために、ただコミュニタリアニズムというよりもリベラル・コミュニタリアニズムと呼ぶ方がわかりやすいと思います。

### ポジティブ心理学とは——「社会における公正」という問題意識との関係

以上が、ごく簡単な今日の学問的な政治哲学の中心の幾つかの考え方ですが、心理学とこれらがどういう関係にあるのか。従来の心理学は、どちらかというとネガティブな心理状況、典型的には精神病の人たちを念頭に置いて、その人々を治していくということが中心だったわけですけども、2000年頃からポジティブ心理学という新しい心理学が勃興してきました。

先ほどの講演でもふれられたマーティン・セリグマンという人が、アメリカ心理学の会長であったときにそれを提起して、それから今まで15年以上が経ちましたが、急速に勃興した新しい理論です。

ポジティブな状況の人、幸福な人の心理状況を調べてみると、実は、ポジティブな心理的な状況のほうが、例えば健康になるとか、繁栄するとか、成功するといった傾向が高いということが、さまざまな実験とか観察によって明らかになってきたわけです。

その心理学において、「三つの領域がある」と初めからセリグマンたちは考えていました。一つ目は、主観的感情です。二つ目が、個人の特性や性格。そして三つ目が、制度。その中に企業や仕事が入るわけです。しかし実は、その後の大部分の研究は、1番目と2番目のほうに集中していて、3番目は弱かったというのが実状です。

そこで代表的研究者たちも、一昨年の世界大会辺りから、3番目の領域、たとえば社会における公正といった問題も考えなくてはいけないということを強調し始めました。

私が、この心理学に関心を持ち始めたのは、ちょうどこの頃なのです。そして、その中心にペンシルベニア大学のポジティブ心理学センターがありますけれども、私はそこを訪ねて、その責任者のジェズム・ポウェルスキ先生に、ポジティブ心理学とマクロな社会やコミュニティや政治との関係については、どういう研究があるのかをお尋ねしました。すると、プリレルテンスキー先生のご著作などを紹介してくださり、応用ポジティブ心理学修士課程のプログラムで教えてきていただいていると伺いました。

そこで私はプリレルテンスキー先生のご著作を読んで非常に素晴らしいと思い、それを紹介するとともに日本でもこういった方向を発展させていきたいというふうに思いましたので、今回、日本に来てくださりとてもありがたいと思っております。

#### ポジティブ心理学と公共哲学・政治哲学

さて、ポジティブ心理学と公共哲学ないし政治哲学の関係は、どのように考えられるでしょうか。

先ほどお話ししました福利型、特に功利主義に近いと考える研究者もいます。

しかし、私は、それよりも美徳型、コミュニタリアニズムとの関係が深いと思うのです。この心理学が始まった頃、あるいは、その背景にある幸福研究において、初めは主観的な良好状態（ウェルビーイング）という概念で幸福度を計測して、それと先ほど言ったような健康とか仕事とかパフォーマンスなどさ

まざまなものとの関係、相関を調べました。主観的なウェルビーイングは、個人が自分の主観で感じるものです。先ほどプリレルテンスキー先生の報告にも、それを用いた研究に言及されていました。

その考え方では、快樂、喜び、そして楽しさなどを研究していると理解されていたので、そういった理論家たち（エド・ディーナーら）も自分自身の研究のことをヘドニック（快樂的）な心理学と呼んでいました。それに対して、さまざまなかたがたが異論を提起して、人間の本当の幸福、あるいは学問的に言えばウェルビーイングには、そういった表面的な快樂ではなくて、もっと深いものがあると主張しています。

例えばギリシャの時代にアリストテレスがエウダイモニアと呼んだ心の中の幸福に近いものです。アリストテレスは、そういったものが、個々人の特性、美德に即して、それが活動として展開するときに、その人固有の幸福が実現するというふうに主張したので、それにちなんでエウダイモニア的な考え方というふうにしばしば呼ばれています。

こういった人たちが、エウダイモニア的な幸福、ウェルビーイングを測るための指標を作って研究するようになり、先ほどの快樂を中心にする心理学の流れとの間に論争が起きました。

私がレビューしたところでは、当然、細かな違いはさまざまにありますけれども、両方とも指標として有効だし、大事だという結論が出されています。ただし、快樂に関しては、主観的なウェルビーイングの指標のほうが、よく捉えられるし、例えば自己実現というようなものは、エウダイモニックな指標のほうが、よく捉えられます。それぞれ意義があるのですが、特色があるということです。

ですから、両方とも意味があるのですが、エウダイモニア的な幸福も調べなければいけないというふうに考える人が多くなっていると思います。

セリグマンたちも、そういった方向も意識した新しい理論を展開していて、最新の議論は「PERMA（パーマ）」と略して言われていますけれども、ポジティブな感情や没入、意味、人間関係、達成といった五つの次元でウェルビー

イングを計測しようとしています。先ほどのプリレルテンスキー先生のお話とも重なる部分が相当あるということが分かると思います。人間関係が幸福感に非常に大事だということは、研究者の一致した見解です。

### アリストテレスを媒介として

さて、議論の展開を私なりに整理してみますと、初めは、功利主義と近いような快樂を中心にする幸福やウェルビーイング（良好状態）の議論から始まり、いま述べた論争を経て、現在は、かなりアリストテレスが言っていたような古典的な考え方にポジティブ心理学が近づいているというふうに見ることができるのではないかと思います。そして、主観的幸福感だけではなくてできれば客観的な状態も見た方がいいという考え方が強くなっています。先ほどのプリレルテンスキー先生のお話の中でも、主観と客観の双方についてのデータが出てきました。アリストテレスも、幸福を内的な精神的状態を中心に考えつつも、外的な財（富や友人など）も必要としています。

ですから、ポジティブ心理学はアリストテレス的な経験的心理学の方向に進んでいるというふうに私は解釈しております。アリストテレスは倫理学や政治学を実践学に分類したのですが、方法論的にも、統計的確率に基づく心理学を厳密な科学と区別してアリストテレス的実践的科学（Aristotelian practical science）と言えらると思います。

こういったようにポジティブ心理学を解釈すると、政治哲学で言うコミュニタリアニズムと非常に近い方向に動いていることがわかります。先ほど言いましたようにコミュニタリアニズムは、「善き生」という善の要素と「共に」という共の要素を強調しています。

サンデルが自分の思想をネオ・アリストテレス主義というふうに言うこともあるので、ポジティブ心理学がアリストテレス的な要素を強めていくということは、おのずとコミュニタリアニズムと接近するということになるのです。先ほど言ったポジティブ心理学センターの責任者でいらっしゃるポウエルスキ先生は、「エウダイモニックな転換」という考え方を提起されています。これらの

場合は、主として「善き生」という「善」の側面を中心に考えています。

### 「公正」・「平等」も考える批判的コミュニティ心理学

それからもう一つ、「共に」という要素のほうは例えばコーリー・キーズ (C. L. M. Keyes) という研究者が「社会的ウェルビーイング (良好状態)」という考え方を提起してそれを調べる指標を考え、大きな影響を与えました<sup>2</sup>。またプリレルテンスキー先生が、個人だけではなく、個人間、コミュニティ、組織、身体、心理、経済という多次元的なウェルビーイングという考え方を提起しました。「共に」という要素への注目が、このように心理学においても広がってきているというふうに私は考えるわけです。先ほど言ったコミュニタリアニズムの基本的な発想と共通の見方が、心理学の流れの中でも浮上ってきていると思うのです。

コミュニティ心理学という心理学の分野がありますが、プリレルテンスキー先生は、その代表者です。社会心理学は、社会における個人的な心理を中心に研究していますが、コミュニティ心理学は、もっとマクロレベルに注目しているのです。コミュニティに基礎を置く病気とか、あるいはウェルネス (良さ) の増進、そして個人の心理的状況へのコミュニティや環境の影響といったものに焦点を当てた研究が展開をされていて、ミクロな個人だけではなくて、メソとかマクロのレベルにも注目して研究しています。

私は、比較的最近になってこの心理学の存在に気が付いたのですけれども、われわれのプロジェクトではコミュニティに重点を置いて研究してきましたので、このコミュニティ心理学は密接な関係にあると思って、プリレルテンスキー先生に来ていただいてお話を伺いたいと思った次第です。

さらに、そうはいつでもコミュニティ心理学でも、コミュニティの中で生きる際の個人のスキルや、小集団のサポートを中心にする研究が多いのです。それに対してプリレルテンスキー先生は、新コミュニティ心理学という表現で、

<sup>2</sup> C. L. M. Keyes, "Social Well-Being", *Social Psychology*, 1998, vol.61, n.2, 121-140.

マクロな考察を重視して公正とか平等も正面から扱うべきだと主張しているのです。その意味では、批判的なコミュニティ心理学なのです。理論的には法兰克福学派の批判哲学を意識して、こういう名称が用いられています。

そしてアイコープ (I-COPPE) という指標を開発して、先ほど言われたような個人間関係、コミュニティ、組織、身体、心理、経済といった多次元的な良好状態を計測して調べる方法も提起されています。一般に平等な国の方が健康状態が良いことも明らかになっています。

### ウェルビーイングを全体としてあげていく

政治学の問題意識からするとここで接点が深まってきたと思えるわけで、例えば政治的な抑圧とか経済的な搾取は、通常の心理学ではあまり大きくは扱われていないのですけれども、先ほど先生がお話になったように、新コミュニティ心理学では、それらが実は人間のウェルビーイングに大きな影響を与えていることを実証的に指摘されています。だから、個人のウェルビーイングを個人的なスキルで上げるだけではなくて、そういったマクロな問題も取り上げて対処していくことが、ウェルビーイングを全体としてあげていくことにとって大事だということになるのです。ですから、批判哲学の流れを受けて、批判的な意識や、経験、行為の重要性を指摘されているわけです。

私は、こういった新コミュニティ心理学の問題意識は、政治哲学で言えば、コミュニタリアニズム、特にリベラル・コミュニタリアニズムと近いと思うのです。

先ほどの講演で正義の定義などを考察されている中で、マイケル・サンデルやミラーのような著名な政治哲学者の定義をお使いになっているので、思考の共通性がよく分かりました。正義をどう考えるかというときにも、コミュニタリアニズム的な問題意識との接点が現れているのです。分配的正義についてマイケル・サンデルのデザート (desert) という考え方にも言及されていましたが、私が「真価 (真の価値)」、あるいは何々にふさわしい価値と訳している概念です。

他面で手続き的なジャスティスとして、公正のような、リベラルで強調され



る要素にも、明確に触れられていましたが、さらに参加も手続き的正義の中に入れて考えられています。このようにリベラルな問題意識とコミュニタリアン的な問題意識との両方が分配的正義と手続き的正義についての考え方の中に入っていて、その意味では、リベラル・コミュニタリアニズムの問題意識に近いというふうには拝聴しました。

※プリレルテンスキー教授からのご教示で、実は1997年に既存の心理学に対して「解放的コミュニタリアン・アプローチ (emancipatory communitarian approaches)」を提起していたこと<sup>3</sup>を後で知った。この指摘は、想像以上に正しかったことになる。

### 個人の繁栄と社会の繁栄の密接な関係

さて、こういった問題をなぜ考えなければいけないかというと、個人が努力して幸福になろうとしても、やはり社会に問題が大きいと難しいからです。これは、ある意味で政治学や経済学では当たり前のことなので、戦争とか独裁、あるいは経済の衰退や恐慌、そして社会的な不公正や貧富などがあれば、幸福度の低下を招くのです。心理学や医学では、病気と健康というのは中心概念なので、それを意識して言えば、これは病的な社会だということになるでしょう。

従って、健全な社会をつくっていくためには、心理を個人だけではなくて、マクロにも考察していく必要があるのです。その意味ではマクロな心理学として、コミュニティ心理学、あるいはポジティブ・コミュニティ心理学が有意義ではないかというふうには私は思うわけです。

精神医学でも1950年代から社会精神医学という領域が存在して精神病理と社会との関係を扱っており、そこから「ポジティブ社会精神医学」を考える試みもあります。かつては、社会全体を理想郷にしようと夢想する考え方が強くて、1960年代後半から衰退し、個人的な社会的ストレス要因と社会的サポートの研究が中心になっています。しかし、この系列の研究でも個人の経験に対する社会的要因の影響は立証されているので、あくまでも個々人の治癒を中心に

---

<sup>3</sup> Isaac Prilleltensky, "Values, Assumptions, and Practices: Assessing the Moral Implications of Psychological Discourse and Action", *American Psychologist*, vol.5, n.5, 1997, 517-535.

しつつも、社会的要因を直視して個人の繁栄と社会の繁栄との関係を追究しようとするのです<sup>4</sup>。ちなみに、プリレルテンスキーの共同研究者である夫人のオラ・プリレルテンスキー（Ora Prilleltensky）はカウンセリング心理学者だそうです。二人の共同研究はまさにマイクロ・マクロ双方を良くすることを目指していると言えるでしょう。

### 日本社会の「ウェルビーイング」の国際的な位置づけ

そういった点で、きょうのご講演は貴重だと思います。さらに先生の著作の中には、これまで日本に焦点を当てたものはあまりないわけですが、きょうのお話では日本について経験的なデータによって国際的に位置づけていただきました。

先ほどの話では、日本は例えば健康とか衛生というような基礎的な、客観的な指標で見ると国際的に非常に高いレベルにあるから、その点では高いウェルビーイングが存在するわけだけども、社会的な正義、つまり社会や政治との関係においてウェルビーイングを見ると、他国と比較してそれほど高くない。だから、日本社会のポジティブな評価できるところと問題点の両方が、主観・客観双方の指標を用いることによって明らかになったのではないかと思います。

そういったことを念頭におきながら、個人と社会という問題を心理学的な観点からも考えていくことが、今後、可能なのではないかと思いますし、このような研究は私たちが追究してきた公共哲学や公共研究をさらに進展していくためにも大事ではないかと思うのです。

リベラルな問題意識は、やはり人権の抑圧のような社会のネガティブな問題に対してどう対処するか、あるいは予防するかという点で非常に重要です。他方で、ポジティブな問題意識、例えばエンパワーメントのように何かを促進するとか力づけるというポジティブな問題意識も、やはり社会科学においても大

---

<sup>4</sup> Dan G.Blazer, and Warn A. Kinghorn, "Positive Social Psychiatry." Dilip V., Jeste, Barton W., and Ph.D. Palmer, eds., *Positive Psychiatry: A Clinical Handbook* (Amer Psychiatric Pub Inc., 2015). Ch.4.

事ではないかというふうに思うので、幸せで健やかな社会をつくるためには、その両方の要素を踏まえた新しい社会科学の発展が望ましいのではないかと私は考えております。

### 経済成長と幸福度の関係、政治的なウェルビーイングについて

最後に、せっかくの機会なので、ブリレルテンスキー先生に対して二つだけご質問させていただきたいと思います。一つ目は、実は、きょうのお話の中にはポジティブ心理学を知る人たちにとってややショッキングな話がありました。リュボミアスキーのような代表的な理論家たちは環境要因よりも、遺伝や考え方が幸福度に大きな影響を与えると主張していたのですが、実際には環境要因あるいはコンテクストの要因も非常に大きなウェイトを占めていて、経済の状況がやはり幸福に大きな影響を与えるということをデータで主張されたからです。特に国際的な比較よりも国内の中における比較で大きな影響があると言われました。

社会科学から見ると、さもありなんと思うのですけれども、先ほどのような議論が心理学で大きくなってきた一つの背景として、「イースタリンのパラドックス」というものがあります。ある程度まで経済が成長するまでは経済成長は幸福度に影響する。貧困なとき、収入が低いときは幸福度が低いのです。しかしある程度、成長していくと、今度は、それを超えて収入が上がっても、さほど幸福度は上がらない。だから、幸福の上昇度が前よりは低くなる。こういう傾向が指摘されていて、心理学者たちも、経済や環境の要因よりも心理的要因が重要だと言っていたのです。今はこのテーゼに対しては批判がなされたり、再調査による反論がなされたりしています。

きょう、先生は、このような論点に対して大きな問題提起をされましたので、そのイースタリンのパラドックスとの関係をどういうふうに考えられるのかということ伺いたいというのが、第1点目であります。

第2点目。私は特に政治学、政治哲学を専門に研究しています。先生のウェルビーイングの多次元指標の中に経済的なウェルビーイングは入っていますが、

政治に関しては特にありません。先ほどスピリチュアルなウェルビーイングについてふれられて、なるほどと思いましたけれども、政治的なウェルビーイングについてはどうでしょうか。

もちろん先生のお話の中に政治と関係する要素、例えば不公正や不平等の問題などが出てくるのですが、政治に関して、どう考えられるのか。例えば指標化する必要があるのか、ないのか。私は日本語バージョンを作るときにその点を考えまして、経済的なウェルビーイングだけではなくて、政治的なウェルビーイングもこの指標の中に入れたらどうだろうかというふうに思っているのです。この辺についても、お考えがあれば追って伺いたいと思います。

(こばやし まさや)